
対無人兵器用有人兵器 MW F UW

鯖味噌汁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

対無人兵器用有人兵器

MWFW

【NZコード】

N8878E

【作者名】

鯖味噌汁

【あらすじ】

トゥール国とズエルダ国との戦争が始まつてはや半年。トゥール国は無人機動兵器生産世界第一位ズエルダ国との勝ち目のない戦争を未だに続けていた。現状を打破し、トゥールに平和をもたらすため、ある有人機動兵器が作られようとしていた・・・・・・

第一話 逃走 Escape

第一章 逃走 Escape

「つたく、どいつもこいつもどうかしてるぜー。」
この青年とも少年とも呼びがたい彼の名は神上涉。かみじょうわたる
彼は運悪くシェルター「コア」と呼ばれる防空壕に逃げ遅れてしまつた哀れな一人。

現在、このトゥール国はズエルダ国との戦争に巻き込まれている。元々、中立国だったトゥールには軍という存在そのものが無く、かなりの苦戦を強いられていた。

なにしろ、ズエルダは無人兵器の生産と輸出が世界一の国。無人兵器に、ほぼ生身の人間で挑んだところで、勝ち目などあるわけもない。

「やべつ！」

そして、シェルター「コア」に逃げ遅れた彼は体長二十m以上の無人兵器に追いかけられていた。

「とりあえず、どっかに……」

闇雲に走っていてもいざれ追いつかれるのがオチといつものだ。
「無人兵器……じゃないな」

十字路を横切つたそこには黄色の何かが正座するよつとして座つていた。

「操縦席があるから……有人兵器……？」

今は、どうでもいいか

彼は乗りなれた車のように乗り込むとじつと彼らが過ぎ去るのを待つた。

「…………」

蛇ににらまれた蛙とでも言ひような状況が一年も続いたかのようになに思えた。

「有人兵器にしちゃ、やけによく出来てるな」
敵から追われてる身にも関わらず、彼の心は有人兵器だけに注が
れている。

外見がどちらかはわからないが、中身はまだ少年らしい。
「説明書は・・・さすがにないか。」

これが・・・機銃か、マシンガンか、ガトリングってとか。
後は・・・後に赤いスイッチ・・・・
やめとこう。

肘掛にあるこいつは多分こいつを操縦するやつか。
モニター・・・当たり前だが真っ黒だな。

・・・小型カメラ?」

「搭乗員の登録を開始」

アナウンサーのような澄んだ声がコクピットに響いた。

「おい！」

「網膜、スキャン完了。指紋、採取済み。登録中・・・・」
室内が静まり返るとともに彼はためいきをもらした。
「ま、登録されるだけなら別に操縦しなきゃいいわけだしな。
慌てる事も無かつたか」

「MWFUW、起動」

あの字もはの字も出ないうちにMWFUWと呼ばれている、その
有人兵器は立ち上がった。

「搭乗員もどんなやつかわからねえのに起動しやがって！」
まだ彼の探索を完了していなかつた彼らは容赦なく気づいた。
「にしても、ひでえ搖れだな、つたく。」

・・・よつしゃ、男、神上涉、見事に散つてやるつか！」

彼は銃の操縦桿だと思われるものを握り、こちらを向いている無
人兵器に発射した。

「し・・・壊れる！」

死ね！というのではおかしいと考えながら言つたらしい。
無情にも彼らは死にも壊れも傷もつかなかつた。

攻撃を受けた彼らは彼を敵と認識し、攻撃をはじめた。

「なんだよこの使えねえのは！」

逃げるが勝ちと行くか！」

装甲を銃弾がこする。

一步足を出すたびに彼の体が鞭打つ。

「なんだよ一体これ！」

操縦者のことぐらいい考えろよー

・・・なふつ！」

世にも奇妙な怪音を発した後に彼が乗つたものは、陥没した道路の上を飛んでいた。

下にいた無人兵器が落ちるとともに踏み潰される。彼の乗つたものはますます不安定になる。

「よくこんなに揺れてよくこけないよなコイツ。

それはともかく、さつきから道路横切る度に敵の数が倍になつてないか？」

現在、無人兵器が我が物顔に闊歩して「は、都市圏からほんの少し離れた都市。

ズエルダが一番、狙いそうなところである。

そこに、有人兵器がいきなり登場し、無人兵器を一機踏みつければ、

全機がそこに向かうのはまず間違いない。

「ちくしょう！こうなつたら・・・・・・」

彼は彼が一番警戒していた赤いスイッチに手を伸ばした。

「花吹雪となりて散るまでだ！」

彼は決死の覚悟で押した。

・・・・・・

しかし、反応が無い。

「・・・スカ？」

次の瞬間、彼が乗つたものは操縦室後部より一筋の光を放った。巻き取られていくちりの如く、無人兵器は灰となり、爆風によつ

て跡形も無くなつた。

「俺……とんでもないことやうかしたのか？」

彼は四苦八苦しながら元のようすにそれを正座をせると、操縦室から後ろの光景を眺めた。

「・・・・・」

道路・・・ビル・・・車・・・無人兵器・・・・・・

全てが元から無かつたが如く、彼が自ら開けた穴に吸い込まれていた。

「・・・・・」

彼は勇敢なる兵士だつたのか。
巻き込まれた一国民だつたのか。

どちらでもあつて、どちらでもない。

「・・・・・」

歓喜か、失望か、悲壯か・・・・・
なんとも言えない。

「・・・・・」

ただ一つ確かな事。

それは、

彼は、もう日常には戻れない。

「・・・なわけねーよな」

彼が作り出した沈黙を破つたのは彼だつた。

「わけのわからないのをぶち込んで、たかだか一部隊を壊滅させただけだ。

別にズエルダを降参させたわけでもないし、決定的な一撃を与えたわけでもない。

そうだ。そんなわけないぞ。

そんな、一次元の世界にしか無いようなことが、三次元にあつてたまるか

彼は自信たっぷりにそう言つた後、また全力で走り出した。

「・・・・・」

何も言わない彼の頬をだいぶ年上の女性が駆け寄つてくるなり叩いた。

シェルター・コアに快活な音が響く。

「心配かけて・・・一体どこに行つてたの！」

「・・・町」

「それが本当だとしたら、よく生きて帰つて来れたわね。
でも、ほら吹きもいい加減にするのよ。」

本当であつても信じてもらえるわけが無い。

無人兵器の大群を息子の有人兵器がやつつけました、なんて親が信じるわけが無い。

「そうだ。俺はホラ吹きだ」

「敵襲警報解除」

そう言つたのと命令が下つたのはほぼ同時だつた。

「さ、家に戻りましょ」

「そうだな」

ズエルダが宣戦布告をしてからほぼ一年。

国民に平和という一文字は無かつた。

町という町に難民者と浮浪者が溢れ、到るところで悪臭が漂つていた。

ここだけは例外。そう彼は信じていたはずなのに今やそれが現実のものとなつてしまつた。

しかも、自分が。

「・・・・・」
「・・・・・」
「・・・・・」

住宅地は全て全焼し、財産も、骨組みさえ残らなかつた。
残つたのは悲壯と絶望だけだつた。

「これからどうするか

「そうね・・・・・・」

彼らは何も考えていなかつた。

考えられなかつた。

絵空事ではない。

絵空事のような絵空事が今、ここにあつた。

「・・・体だけは・・・・・・」

「何そこまで勝手に思い込んでるのよ。

普通に働いて稼げばいいだけじゃない」

「・・・・・・」

今、現実的に働ける場所。

兵器工場に他ならない。

戦争が長期化し、国の財政もピンチを迎えている中、
働く場所はそこしかない。

まだ、かろうじて商業は成り立つているが、明日なくなつてもおかしくはない。

過酷な労働、安い賃金。

それでも、職を求めるものは「まん」といた。

「あなたは志願兵にでもなれば少しは裕福な暮らしができるかもね。

・・・死んでも引き止めるけど」

「そこは絶対にならなさい。たとえ徵兵でも行かない

「さすがに徵兵だと・・・・・・」

「行つてもいいのかな

こんな暮らし、一体ここまで続くのだろうか。

「敵襲警報発令」

今日も家があつた場所に来ることしかできなかつた。

「ズエルダは一時間も休みをくれないのか」

彼は駆け出した。無論、理由は言わなくともわかる。

「どこに行くの?」

「少しでも自分ができるひとを・・・な

彼の行き着く先は決まっていた。

「自分でやつたことくらい、後始末つけなきやな！」

「誰が元の場所に戻したのかは知らないが、そこにはやはりそれがあつた。」

彼は今度も乗りなれた車に乗るよに乗り込んだ。

「搭乗員、登録済み。MWFW、起動」

足の屈伸運動によつて、機体が起立する。

「上にはレーダーか。敵の数は前より少なさそうだな。

俺を警戒して・・・か」

この前より少ないとはいえ、点の数は優に二十を超える。

二十対一・・・・・数の上では劣勢である。

「近くにいるのは・・・通りを曲がったところにいるあいつか・・・

・・・」

ひどい揺れに悪戦苦闘しながらも確実に足を前に進めていく。

「見つけた！」

奇遇にも彼は彼に向こうを向いていた。

「蹴つたりとか出来るか、試してみるか」

彼の真後ろまで近づく。

気付いたところで遅すぎる。

「おりや！」

それは右足を自分の体長より高く上げ、見事に彼を蹴り上げた。

横転しながら奥に転がつていく。

彼は彼を追尾する。

「とどめだ！」

それは彼を踏みつけた。

彼は音も出さずに動かなくなつた。

レーダーから一つの点が消えた。

「よつしゃ！ 次は・・・後ろか！」

一機破壊したのだから、彼の居場所を突き止めて彼らが襲つてくる

るのはほぼ間違いない。

ターンしようとして田一杯レバーを切る。

しかし、高層ビルに激突して後ろ向きに転がるといふなんとも悲惨な結果で終わる。

「ぐつ！・・・く・・・・・・・

自動プログラミングで後転し元の姿勢に戻る。

「小回り効かねえのかよ！

後ろならあれをぶつ放しても問題ないが、一機に対してもだと・・・・・

それに無人兵器だつて馬鹿じゃないからな。一回田はないだろ」「しかたなく十分機体を逆向きにさせられるような場所を求めてひた走る。

といつても、二十メートル近い物体を回転させられるほどの広場はこんなところにあるわけがない。

「なんか武器ねえのかよ！ブレードなり地雷なりなんなり！しゃあねえ、一か八か、跳んで向きでも変えてみるか！」

それはもとのよつた正座の体勢になる。

「行けつ！」

思い切り屈伸運動をさせると機体は見事に跳んだ。

「と、飛びすぎだろ！」

それは田の前にあつたビルの上に着地した。

地上百メートルは下らない。

「何のためにこんなに跳べるよつにしたのか・・・・・まあいいか」

屋上でそれを反転させ、それが落ちる重力と共に彼を踏み潰した。が、やはり前のめりに倒れてしまった。

「どこまでバランスおかしいんだよ！」

研究者出て來い！」

後転すると元の体勢に戻った。

「次は・・・なんだこいつ！」

その点はジルを貫通して通り、今までに無い速さで近づいてくる。

「この速さ……陸上じゃない！」

頭上を轟音が通過した。

「あそこまで跳ぶにはさすがに無理だな。

機銃は上に向きそぐに無い。

あれで……あの速さじゃ追いつけるわけが無い」
レーダーがミサイルにロックされたことを告げた。

「やべえ！」

慌てて走り出すが、無論ミサイルが走ってかわせる物ならミサイルとしての価値は無い。

直撃は避けられたが足にまともに当たった。

あまりにも予想外な出来事に反応できなかつた彼はモニターに頭を強く打ち付けた。

「つ！・・・・・・・・」

彼の目が霞む。

「……こんなとこでくたばつてたまるかよ！
俺には後六十年生きる権利があるんだよ！」

田の霞みが少し薄らいだ。

「・・・このモニター、タッチパネルか？」

彼の頭は激突した瞬間にわずかに反応したモニターを覚えていた。
彼が点に触れると、それに四角の囲いが出来た。

「発射のやつが出ないということは・・・・・・」

彼は全ての点に囲いをつけていく。

「くらえ！」

彼はモニターを連続で一回触れるとそれは大量のミサイルを一度に発射した。

爆撃音が到るといひで聞こえる。

「やり！」

爆撃した戦闘機が火の塊となつてこちらに向かってくる。

「ちくしょー！」

それはその足元に不時着、爆発した。

操縦室だけになつたそれはあちこちを飛び跳ねながら何度も転がる。

強い刺激を体全体に受けた彼は何回ぶつかったのかもわからなくなつた後、そのまま目を閉じてしまった。

第一章 真実 The truth

第一章 真実 The truth

目を開けたそこは清潔そうな部屋だった。

清潔な壁。

清潔な床。

清潔な寝具。

何もかもが清潔で、おもしろみが無かった。
もちろん、こんな部屋を見たことがあるわけがない。

「・・・拉致か？」

その可能性が高い。

「ん？ そういうえば、これって拉致か？ それとも誘拐なのか？」

彼は素早く布団から出た。

「どっちみち、無人で監禁はしないだろ？ つからな。
誘拐したやつに聞いてみるか」

扉は造作も無く開けられ、廊下には複数の扉と奥に別な扉があつ
「俺がいた部屋と同じ扉が何個もあるってことは、こいつは多分
彼は反対にあつたその扉を二、三回叩いた。
「・・・・・」

応答が無い。

今度はその右隣の扉を叩く。

「・・・・・」

応答が無い。

今度はその反対側の扉を叩く。

「・・・・・」

応答が無い。

今度はその左隣の扉を叩く。

「・・・・・」

応答が無い。

「三部屋も叩いて返事が返って来ないって事は、どう考へてもその扉が怪しげことだよな？」

彼は廊下の端の扉を叩いた。

「・・・・・」

応答が無い。もう一度叩く。

「・・・・・」

強めに叩く。

「・・・・・」

連續で叩く。

「・・・・・」

殴る。

「・・・・・」

蹴る。

「・・・出で来い！」

「勝手に入れー！」

彼の気分とは正反対の半分間抜けな声が返ってきた。

彼は扉を蹴り破った。

扉が床に倒れる。

「おいおい、何やつてんだよ。修理代払えよな」

ちょうど彼の父ぐらいの年齢をした人物が彼を見ずに言つた。

「キレさせたおっさんがないんだらうーが

「これだから近頃の若者は・・・・・

若者よ、広い心を抱け」

外見からは不似合いすぎる返答が返ってきた。

「それより、拉致と誘拐の違ひって何だ？」

彼は一息ついてから言つた。

「拉致は、その人物自体に意味があつてどこかに監禁することでの誘拐は、その人物を利用して何かをするために監禁する事じゃな

いのか？

ま、そこのコンピューターで調べてみる。回線ならつながっている。

アナログだけどな

「コンピューターかよ。パソコンじゃねえの？」

「そんなもの、二ラレバとレバニラみたいなもんさ。大して差が無い」

「同じじゃねえのかよ」

「馬鹿者。二ラレバは二ラが主体で、レバニラはレバーが主体だろ」「二ラばっかりの二ラレバなんて食いたくねえよ。

第一、どっちも嫌いだ」

「この世にはずいぶんと不幸な人間がいたもんだなあ！

レバニラをまずい、と？二ラレバをまずい、と？

お前今すぐそこの回線切つて首吊つて死ね。

実家に帰れ。いや、土に還れ」

よほど二ラレバとレバニラに情熱を燃やしている人物らしい。

「・・・・・

いや、実家つていうか、そもそもなんで俺を拉致したんだ？」

「その前に拉致と誘拐の区別をはつきりつける必要があるんじゃないのか？少年」

「まあ、その通りだな」

彼は比較的慣れた手つきで辞典を検索する。

「ほう、やはり若者は適応能力が高いな。

まあ、それだからMWFWUWを乗りこなせたわけだがな」

話に答えながらも田は画面に釘付けになつていてる。

「MWFWUW？ そういうえば起動する時にそんなことを言つていたような気がする・・・・・つて、

おっさん、あれに関係あるのかよ！」

「もちろんだ。

じゃあなんで、中学の成績がオール三の「じへ普通のやつを拉致す

る必要がある。

「呼ぶとしたらオール四か五つでとこだる?」

「なんで成績を・・・・・」

「お前のデータベースから調べさせてもらつた」

「おっさん、ハツカ一か?」

「ヒーを注ぎに彼は立ち上がつた。

「そんな事を国家研究員がやつてたまるか

「おっさん、国家研究員かよ!」

「ヒー豆を挽く音が聞こえる。

「その通り。じゃなければ戦闘兵器の開発なんて出来るわけないだろ?」

「金持ちでも無いのに」

「ところで、MWFWって何の略だよ」

「Manned Weapon For Unmanned Weapon」

「で、意味は?」

「対無人兵器用有人兵器」

「わかりやすく言つと?」

「十分わかりやすいだろ」

「・・・確かに」

「わかるなら言うなよ」

彼は豆を挽き終わり、挽いた豆をフィルターに移し替えていた。

「ヒーになにかこだわりでもあるのか?」

「この歳で緑茶を貪相にするのも格好がつかないしこれしかないからどうせなら・・・という理由だ。そろそろ検索できただろ?」

「ああ、拉致は無理矢理人を連れて行くこと、誘拐は人を騙して連れて行くこと。だとさ」

「ほらな、俺ので良かつたろ?」

「いや、多分違う

彼は挽いた豆の上から熱湯を注ぎいれていた。

「おい、少年どこへいく」

彼は立ち上がりて扉があつた部屋と廊下の境界線に立っていた。

「用が済んだらとつとと帰る。これ鉄則」

彼は部屋に着くなり布団に横になつた。

そして深く瞬きをした。

「とにかく、要約すると俺が乗つてたのはあのおっさんが作った対無人兵器用有人兵器・・・だつたか？で、辞典によると俺は拉致されたって訳か。

そもそも、何で拉致するんだ？

それにあんなものがあんなところに置いとく意味がわからねえ

彼はゆっくりと横を向いた。

「とりあえず、とんでもないことになつてきた・・・のか？

つて、もう十一時前かよ。さつと寝るか」

第三章 劇物 Deleterious substance

第三章 劇物 Deleterious substance

彼は昼もかなり過ぎたあたりによつやく起きた。

「午後一時・・・十三時間も寝てたのか」

そもそも彼は用覚まし時計も設定しなければ、自分で起きる事も無遅く起きてしまうのは当たり前だ。

「腹減つたな・・・・・・」

そう言つと顔も洗わずに部屋から出て行つた。

行くのはもちろんあの部屋だ。

「おっさん、飯」

「俺は飯じゃない」

「屁理屈言つなよ」

机の上には少し汚れた皿が数枚置かれていた。

「何食つたんだ?」

「パンとサラダとベーコンエッグを少し」

「あんた日本人かよ」

「日本人は日本食を食わなきゃいけないという法律は無い。」

「一応、米とパンはある。好きなほうを料理して食え」

「米つて・・・まさか炊いてないのか?」

「彼はまた「一ヒーをssする。」

「もちろんだ。俺はパン派だからな」

「・・・そういうえば名前聞いてなかつたな。」

「なんていふんだ?」

「城ヶ咲英だ」

「ホストみたいだな」

「お前も人のこと言えないだろ神上渉、なんてぞ」

彼は遅すぎる朝食の支度をはじめた。

「俺を拉致したのはなんだった？」

「お前が一号機の搭乗員として登録されたからだ」

部屋に肉が焼ける音が聞こえる。

「登録されたから連れて來たのか？」

「そうだ。」

一回登録されると潰して再利用する以外ではそいつしか乗れなくなるからな。

お前は専属の搭乗員、というわけだ

部屋に肉の香ばしい匂いが漂う。

「つまりはたまたま乗ったのが運の刃ででした。っていうわけか？」

「そういうことだ」

塩と胡椒を降りかける音が聞こえる。

「何あんなところに・・・」

「MWFUW」

「そう、それ。を置いといたんだ？」

「搭乗員のテストみたいなもんだ。」

それにたまたま乗つてうまく乗りこなせれば合格。とこのわけだ

「ズエルダとかに利用されたりしないのかよ。」

それ以外でも悪い考えを持つた奴とか

「万が一に備えて自爆スイッチはこっちが預かっている」

彼はそれを手に持つて彼に見せた。

「つてことは、俺はおっさんに命を握られてる・・・つてことか？」

「緊急時以外に使つたつてこっちが損するだけだけどな

油が跳ねた音が聞こえた。

「あちつ！・・・ちつ・・・・・・・

ところであれの

「MWFUWだ」

「妙なところを細かくするなよ。

で、それの

「

「MWFUWだ」

彼がフライパンを握る手に力が入った。

「MWFUWの赤いボタンを押したあればなんなんですか」「見たとおりのレーザー砲だ。

「言つとぐが、あればそれの」

「MWFUWじゃないんですか」

「まあ、そうカリカリするなつて」

「おっさんが悪いんだろ」

彼は一つ溜め息をついた。

「わかつた。お前も正式名称をわざわざ言わなくていい。で、あればそのエネルギーをほぼ全て消費して撃つてるから、初盤にぶち込んだらアウトだな」

彼は肉を皿に盛り付けると戻ってきた。

「お前・・・朝からステーキかよ」

「正確に言えば昼、だな」

かなり大きめに切った肉を口へと運ぶ。

「ま、育ち盛りにはこれが一番、ってやつさ」

「お前、育ち盛りかよそれでも」

「十代だからな」

彼は溜め息をついた。

「溜め息をつくと幸せが一つ逃げるぞ」

「残念ながらそんなメルヘンなことは一切考えていない壯年なもん

で

しばしの間、肉を噛む音と「ヒーヒー」をする音しか聞こえなくなる。

「・・・・・」

「・・・・・」

「・・・・・んつ！」

彼は空中をもがき苦しんでいた。

「どうした！発作か！また若い命が一つ亡くなるのか！」

彼は必死に「コーヒー」を指差している。

「なんだよ、飲みたきや 飲みたいって言えぱいいものを。待つてろ。今熱いのをいれてやるから」「

彼は何か口の中抗議しながらおももがきづづける。顔面は徐々に青くなっていた。

「ほら、熱くて火傷するなよ」

そんな忠告を聞きもせずに彼は一気に飲み干した。そして、何かとともに吐き出した。

「だから、注意しろって言つただろうが」「

「そういう問題じゃねえよ!」「

彼は若干過呼吸氣味になりながらも話す。

「俺は沸騰したお湯のんでも平氣なぐらい舌持つてのけどよ」「お湯は沸騰してるからお湯なんだろ?沸騰したのは水だ」

彼の呼吸がようやく整ってきた。

「そこは突つ込みどこうじやないし、第一おっさん、変なところが妙に細かすぎ」

「これでも一応妻子持ちだが」

彼の呼吸が正常に戻った。

「馴れ初めは?」「

「単なる幼馴染・・・ってそこは今聞く質問じゃないだろ?」「

「そうだな。で、俺が一番言いたいことは・・・」

彼は決定付けるかのように真っ直ぐに「コーヒー」カップを指差した。

「なんで、コーヒーがこんなに甘いんだ?」「

「これでも少し少なめにしてやつたんだけどな。角砂糖十個に」
彼は思い切り机を叩いた。

「十個・・・・・・」

彼は驚きの表情ではなく、諦めの表情を浮かべていた。

「アナタ、スウジ、ヨメマスカー?」「

「何横文字になつてんだよ」

「お前の砂糖の量は絶対一桁間違つてる」

「ほひ。お前は百個 「

「どう考へても逆だろ！」

彼の怒りはいつそう激しくなった。

「まず落ち着けって。これでも飲んで

彼は思い切りコーヒー カップを投げつけた。

流れ出したコーヒー の上にカップのかけらが浮かぶ。

「これは飲物じゃない。劇物だ」

「何を失礼な事をおっしゃいますの！あなたは！

「コーヒー に謝りなさい！」

「譲様言葉を使つたところで意味は無い！

これは法律違反で、規格外で、薬物で、生物兵器で、人類の敵だ

！」

「何を大げさな

彼は下に散らばつたままのコーヒー を下茹するように見ながら言った。

「はつきり言つとあなたに対して馬鹿の一文字しか浮かびませんよ」「

「最低限お前より学歴は

「成績どひこひ、学歴どひこひの問題じゃない！

「これは人間としての常識だ！」

彼は彼に視線を戻した。

「俺のやることは俺の常識にさえあつていれば全て常識だ」

「・・・もういいや」

彼は半分千鳥足になりながらもよろよろと立ち上がった。

「おい、たかだか四十代の壮年に挫けていいのか少年よ

「・・・いいんだ。今は」

彼が力無く扉を開けかけた瞬間だった。

「おっ！ついに三号機ヒット！」

「三号機？」

彼はさきほどのことも忘れ、彼と一緒にパソコンの画面を見た。

「MWFW三号機がヒットしたんだよ！」

「ヒットって、まさか野球でもさせてるのか?」

「・・・有人兵器にそんなことさせるとモジトウールは暇じゃないからな。

搭乗員が登録されたってことだ。テストに引っ掛けたんだよ
彼は目頭を押さえた。

「なんと、またこんなおっさんのために餌になるやつがいたとは・・・
・・・」

「お前が第一号なんだけどな」

「マジかよ」

「他の部屋には誰もいなかつただろ?」

彼はつい先日のことを思い出す。

「・・・確かに」

「ともかくにも、新人さんのお手並み拝見とここうじゃないか!」

第四章 冷徹 Cook-headedness

第四章 冷徹 Cook-headedness

モニターに映し出されたのは六脚で背中に砲台を一基ついているものだった。

「へー。じつこいつのか。俺のやつよりかっこよさそうだな。

そういえば、三号機って言つてたが、そりすると二号機はなんなんだ?

一号機と二号機があつて一号機が無いわけはないだろ」

「それが、二号機は実はお前より早くテストに引っ掛けたんだが、な、そいつがものすごいヘタレであつという間に大破したもんだから、一から作り直し中なんだ。といつても今日には出来上がるらしいが。

そいつの名前は・・・長谷川航平・・・だつたかな

「・・・どこかで聞いたことのある名前だな」

「気のせいだ。決して作者にいれると頼まれたからいれてやつたんじゃない」

「作者つて誰だよ」

彼は無視して会話を続ける。

「三号機の搭乗者は・・・と」

彼の目はモニターではなくパソコンの画面を見ていた。

「ものすごい数だな」

「当たり前だろ。ここに住んでいる全員の名前が書いてあるんだから

ら。

そういえば搭乗者の顔を見るのを忘れてたな

彼は再びモニターへと視線を移す。

「・・・ほつ、結構イケメンじゃないか

「・・・まあな」

「わざと、写真撮合・・・うど・・・・・・」

パソコンが自動的に検索を開始する。

「名前は剣崎龍牙、歳は十八、性別男、お前と違って高卒だな」

「学歴は・・・出来」

「なんだと！」

「ま、俺と同じくらいか」

彼は疑いの目を彼に向ける。

・・・国家研究員になつたんだから、『たり前だろ』

お、10万円の

「」

卷之三

「金持の人生」

「違
う。」

俺は両親が国家研究員つていう立派なサラブレットです」

「・・・本当なんだか」

「国家研究員に面接は無いからな」

- もれなじい会員かしら

—やく術が行動を開始した

「三國」機械高文

一
卷之二

「テストが来るまで教えない」

彼は手を合掌し、頭の上に左

そこをなんとか！」

「やだねつたら、やだね

古ノ文

彼が少し嫌な顔をする。

「まだ現存してるぞ」

「そういう問題じゃないんだよ。流行つてやつだ」

「はいはい、どうせ私は流行に乗り遅れていく壯年Aですよーだ」

別のモニターが近くに彼らがいることを伝える。

「俺つて出なくていいのか？」

「当たり前だろテストなんだから。」

お前が出て行つたら子供の入試に親が付き添つてやるよ!うなもん
だ」

「親つて言つたつてたかだか二回の戦闘経験しかないけどな」

彼が一番近くにいた彼らにレーザー砲を発射した。

「レーザーかよ！」

「言つただろ? 高火力つて。

それにしてもいいな、こいつは無口で。

お前の時は独り言ぶつぶつぶつぶつ言いまくつてるからストレス溜まりまくりだつたぞ」

「・・・それは悪うござんした」

彼は彼らに向かつてミサイルを発射した。

「もう使い方覚えたか」

「そんな悠長なこと言つてられるのか?」

彼はレーダーのモニターを指差す。

数限り無い点がうごめいていた。

「三号機なら抜け出せるな。一号機だと無理だが」

「なんで俺は無理なんだよ」

彼はなぜか足を組んだ。

「一号機の最強武器は搭乗室後部から出る極太レーザーだ。

あれだと一方向には抜群だが広範囲となると話は別だ。

三号機は全ランチャーからのミサイルとレーザーの乱舞。

ミサイルの数は最大で三百五十近く搭載可能だつたはずだから確

実にやれるな。

「使えればの話だが」

彼は両手を使って彼らにロックをかけ始めた。

「ずいぶんとトントン拍子だな」

「まあいいじゃないか。手間が省ける」

辺りを煙が覆い、目視が不可能になつた。

「上上つてとこか」

レーダーモニターの点は全て無くなつていた。

「ちょっと待てよ。三号機も写らないぞ」

「たぶんお前と同じ様に飛んできたやつらにぶつかって操縦室だけになつたんだな」

彼は疑問に思った。

「俺が操縦室だけになつて氣絶しなかつたらどうしたつもつなんだ？」

「・・・誘拐、かな」

「あいつの場合でもか？」

「そういうことになるだろうな」

彼は小さい声でしつづぼやいた。

「・・・計画性無を過ぎ」

彼が運ばれてきてから約一時間が経つた。

「そろそろ起きてくるところなんじゃないのか？」

「そうだな。起こしに行つてくるか」

彼は運ばれてきた初日とは大違いでノックした。

「許可する」

「許可するつて・・・・・・」

彼は扉を開けた。

「やー、おは

と詰つ暇も無く、彼は彼に背負い投げされた。

彼の背中に電撃が走る。

「お、お前・・・・・・」

「俺の名前はお前ではない。剣崎龍牙だ」

「さつき許可するつて言つたくせに・・・・・・

それに初対面の男にいきなり背負い投げつて・・・・・・」

「許可したのは部屋に入る権利だ。俺の体に触れる権利じゃない。

それに、俺は初対面であるうが、女であろうが不審な奴には容赦しない。

ましてやそれが、俺を拉致した犯人に近いと思われる人物ならな
彼は背中をさすりながら立ち上がった。

「こここの床は置じやないんだぞ」

「受身を取らなかつたお前が悪い。ちゃんと攻身を取つていれば
すぐに反撃できたはずだ」

彼は一つ溜め息をついた。

「・・・俺、神上涉」

「証拠となる物は」

「・・・そんなもんねーよ」

「なら信用できないな

「名前ぐらい信用しろよ」

彼はなんとか椅子に座つた。

「お前のような偽名らしい偽名など、とつに信用できん

「偽名じやねえよ！それに剣崎龍牙つてなんだよ！剣豪みたいな名
前しやがつて」

「その通りだ。俺の家は鎌倉時代から続く剣崎家だからな。
無論、鎌倉から江戸にかけての先祖は全て武士だ」

「とりあえず、信用してくれないか？」

彼は彼を睨んだような目つきで見た。

「わかった。通称、神上涉ということにしておいてやるが

「・・・どうもその立場上ですよー目線が気に食わないんだよな

「実際そうだろうが」

「はいはい」

彼は彼にみぞおちをくらわせた。

「なつ・・・かつ・・・・・・」

「はいは一回だ」

「彼は白田を剥き出しにして氣絶した。

「強すぎるのも罪だな」

第五章 休息 Rest

第五章 休息 Rest

彼は気絶する前とほぼ同じ状態で起きた。

「剣崎龍牙の第一印象・・・最悪。

少なくともコンビには組めそうに無いな」
時刻は気絶する前とほぼ変わりなかった。

「そうか、二時五十五分か・・・ん?」

彼はもう一度時計を見た。

「起きた時間は一時半より過ぎ、それから一時間待つて気絶をせられただってことは・・・・・・

また十一時間以上寝ちまつた

彼は椅子から立ち上がりた瞬間にようやく起きた。

「つ・・・・腰痛い・・・・・」

「どうした神上。腰なんかさすつて」

そこには彼らが座つて談義をしていたところだった。

「・・・昨日とは大違いだな」

「あの時は初対面だったからな。まさかお前がMWFWの搭乗員とは知らなかつた」

「名前がわかるつてことは、ある程度聞いたんだな?」

「そうだ。城ヶ咲研究員から聞いた」

彼は苦笑した。

「なにがおかしい

「城ヶ咲・・・研究員か」

「お前に言われる筋合はねえよ」

彼は苦笑しながら椅子に座つた。

「で、お前らもう午前三時過ぎだと思うが何か食わなくていいのか

？」

彼らはパソコンの時計を見た。

「ここには時計が無いし窓も無いからな」

彼は思い出すよつに言つた。

「ところどころどこなわけ？」

「お前らの町のちょうど下だ」

「具体的にどのあたりなのですか？」

彼はまた苦笑した。

「何がおかしい」

「いや、何でもない。続ける」

「・・・また殴つて欲しいのか？」

「それだけは勘弁」

彼は彼に向き直つた。

「話を戻しますが、具体的にどのあたりなのですか？」

「役所から地下約五百メートルのところにある」

「なんでそんな地下にあるんだ？」

「地上に陣構えてたら狙われてTHE ENDだ」

彼はまた質問をした。

「破壊された一号機、三号機はどうなつているのですか？」

「どつちもつこさつき出来上がつた」

「ちょっと待てよ。もし、全機が修理中の状態でやつらが襲つてきたらどうする気だ？」

「役所周辺にある兵装ビル郡の助けをかりるしかないだろ。足止めにしかならないけどな。

その前にしばらくやつらは来ないだろ。あれだけのことをやつたんだからな。

その分、次に来る時は今までの比じゃないやつらが来るだらうな。

その前に一号機のテストが引っ掛かつて欲しいもんだ」

彼は椅子から立ち上がつた。

「どうしたんだ？」

「お前の知ったことではない」

そう言つて彼は台所へと向かつていった。

「どうしたんだ?」

「少し夜食を……と思いまして」

「……あのな前、人と接する態度をそつやつて変えるのやめる。嫌われるぞ」

「友達、親友などといふのは人間にとつて暇を潰すための縛に過ぎない」

「……それだからだめなんだ」

彼はやかんに水を入れはじめた。

「そもそも、お前に嫌われたところで俺にとつてはプライドだ

「ずいぶんひどいこと言ってくれるじゃないか」

彼はやかんの底を拭いて火にかけた。

「結構几帳面なんだな」

「いくら拉致されてきた場所だからといってガス代を無駄にするのは良くない」

「ガス代なら税金だから思う存分使つていいぞ。水道代も電気代も「税金」というならなおさらです。ただでさえ苦しい市民の懐を分けてもらつてるんですからさらに大事にしなければなりません」

彼は台所を漁りはじめた。

「なあ、一|号機のこと教えてくれよ」

「やだねつたら、やだね。やだねつたら、やだね。はこ~ね
はち~り~の~は~んじ~いろ~お~つお~」

「熱唱しなくていいから。しかも歌詞が間違つてゐる気がするのは俺だけ?」

「氣のせいだ。もし違うなら作者のせいだからな

「だから作者つてなんだよ

誰も答えない。

「シカトするなよ」

「ところでその歌はなんですか?」「

「氷川きよしの『箱根八里の半次郎』」「最新の曲ですか？」

「二、三年前だったかな？」

「ということはSPEED解散とほぼ同じ時期ですか
いや、SPEEDはもつと前だろ？」

「その頃に聞いた最新の話題はそれだつたが。
なぜかそれをその頃に言つたら大爆笑だつたが
当たり前だろがよ」

彼は彼の前にスナック菓子を置いた。

「どうも」

「それを食べて待つてください」
彼はそれを横取りしようとした。

が、あっけなく彼に妨害されてしまった。

「・・・また殴りやがった」

「あいにく、暴力でしか感情表現が出来ない性質でな。
お前はこれでも食つて待つてろ」

彼は彼に何かを投げた。

「・・・するめ・・・・・」

「お前だつてまだ若いんだろ？あごを鍛えろあごを

「・・・親父みたいなこと言つなよ」

彼はそれをじっと見ている。

「交換しないか？」

「まあ、いいが・・・するめの方がいいのか？」

「最近、酒飲んでなかつたからな」

彼は台所に向かった。

が、またもや彼に妨害されてしまった。

「・・・お前、口と手と一緒にしろよ

「奇形児にでもなれといふんですか？」

「そういう意味じゃない。第一、酒ぐらいいいだろ。酒ぐらい」

彼はまた台所に向かう。

が、またまたもや彼に妨害されてしまった。

「国家研究員たる者、酒と煙草と女は禁止すべきです」

「・・・そういう法律ないんだからさー」

今度は彼に気付かれないように忍び足で行った。

が、彼に振り向きざまに顔面に肘うちをくらわせられた。彼は壁まで一気に吹っ飛んだ。

「・・・てめえは俺を怒らせた」「

彼は彼に掴みかかるとする。

しかし、あっけなくかわされ、首を絞められた。

「このまま、グキッといきたいですか?」

彼は彼の手を思い切り何度も叩く。

彼は背負い投げで無理矢理戻された。

「剣崎龍牙に対する心得その一。逆らうな

「・・・OK・・・ボス・・・・・・

彼の顔が床に突つ伏した時、やかんの水が沸騰した。彼は用意しておいたカップ麺にお湯を注ぐ。

「出来ました。あと百六十五秒待ってください」「

「OK・・・・・・」

「・・・俺のは?」

「それぐらい自分で作れ」「

「・・・つたく」

彼は彼と全く同じ動作を繰り返す。

「ところで今の、実力の何割?」

「一割九分六厘つてどこか

「・・・細かいな。まあ、だいだい三分の一とこいつとか

彼はひたすらに待つ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・」

「・・・・・なあ」

「なんだ？」

「話さないか？何か

「何も話すことだけが暇を潰すための方法じゃない。

瞑想なり考え方なりしろ」

彼は考え方をする。

「そういえば、おふくろどうして居るかな・・・・・行つたつきり戻つてないからな・・・・・心配してるだろうな・・・・・そ
ういえばここつて軍の制服とかないのかな・・・・・あつたらか
つこつくんだけどな・・・・・そういういえば

「考え事するなら静かにしろ。瞑想の気が散る」

「え？俺、脳内でしか考えてないけど。まさか心の声が聞けるってやつか？」

「そんな非現実的なことを言つたな。それにお前、あからさまに考え方口に出してるよな」

「そうなのか？」

「今までの十何年か気付かなかつたのか？」

「今までの十何年か気がつかなかつたってやつだな」
彼は最後にこうつぶやいた。

「お前、結構優しいとこあるのか」

「は？なんつづった？」

「空耳だろ」

「まゝたまたま。そんないと言つてる時に限つて結構良い事言つてたりするんだよな」これが
やかんの水が沸騰した。

彼はカップ麺にお湯を注いだ。

「・・・お前、カップ麺の表示読んだことあるか？」

「あるぞ」

彼はお湯を入れてすぐ食べていた。

もちろん、麺は固まつたままである。

「・・・」に『』ぬ湯を入れて三分待ちましょう』って書いてある
だろ」「

「知ってるや」

カツプ麺を通常通りに食べている時にはありえない音が響く。

「普通のことは絶対にやらない。これぞマイ・クオリティー」

「発音悪いな。 Qualityだろ？それにQualityは品質
っていう意味だぞ」

「細かいことは気にしない。これぞマイ・クオリティー」

「だから、意味間違つてるって言つてるだろ」

何もかも無視して彼は食べつづける。

彼は床から再起動した。

「城ヶ咲英、再起動」

「MWFUWの音声パクるなよ」

「もともと著作権は俺にある」

そういうと彼はまだ百六十五秒経つていないカツプ麺に手をつけ
た。

「まだ早いですが」

「俺は少し固めが好きなんだ」

「俺は固すぎが好きなんだ」

「お前は例外だ」

ようやく普通にカツプ麺を食べる音が響く。

「お前は食わないのか？」

「あと五秒だ」

「・・・細かいな」

彼は四秒後に食べはじめた。

「一秒早いじゃないか」

「一秒早くカツプ麺を食べる。これぞMy Quality

「自分で意味否定しておいて使つなよ。・・・発音良いのは認める
が。」

それに台詞がかぶつてる、「

「台詞は黒澤監督が撮る映画に出演している役者のみが使っていい言葉だ」

「ずいぶん古い」ところは知ってるんだな

「あの勝進太郎を帰らせた黒沢監督が古いだと？」

恥を知れ「

「実際そなんですけど」

「彼がまた一口運ぼうとした時だつた。

「引っ掛けた！」

彼は口に含んだ物を撒き散らしながら言つた。

「一弓機か？」

「その通りだ！・・・だが、やつらが来てないな。

戦闘以外のときは隠すようにしてあるのに」

「じゃあ、どうあるんだ？」そのままだと乗つたやつに好き放題やられるぞ」

「お前らが行つてとつ捕まえてこい」

「了解

「・・・りょう・・・かい？」

彼が少しパソコンをいじると部屋の隣に一人用のエレベーターが表れた。

「それに乗つて格納庫に行け。その後は乗り込めばそれでいい。後は俺が指示する」

「いよいよそれらしくなってきたな」

「一人はエレベーターに乗り込む。

「では、御武運を」

エレベーターが凄まじい勢いで上昇する。

格納庫に着くまでに十秒とかからなかつた。

二人はそれぞれに乗り込む。

「これから一機同時に地上に引き上げる。Gに注意しN」

「G?なんだそりや」

「飛行機とか宇宙船が急激に上昇する時に発生する強力な重力のことだ。

体に強い衝撃がかかる。

用意は出来たか?」

「完了しました」

「いつでもどうぞ」

「MWFUW一号機、二号機、射出!」

第六章 関西 Kansai

第六章 関西 Kansai

「……吐きそつ……」

「……我慢しろ……」

言われると本当に吐いてしまいそうになる。

「一号機は一号機と三号機より一倍以上足が速い。
ま、やみくもに追つかけても無駄だつてことだな」

「城ヶ咲研究員。やつは聞いていませんが」

「そりだらうと思つたさ」

一号機はすでに走り出していた。

「一つ目の交差点を左……か。

気付いていない今なら追いつける！」

一号機は相変わらずの均衡感でなおも速度を上げる。

「見つけた！」

二号機は一号機と対して変わりがなかつたが、両腕がついていた。

「脚部の損壊はまだ許す。

搭乗室だけは絶対に壊すな

「もらつた！」

一号機と二号機の差があと数メートルと迫つた。

しかし、二号機が振り向く。

一号機は後退する余地も無しに二号機へと突つ込む。

二号機は迫り来る一号機を受け止め、遙か前方へと投げた。

「なあつ！」

一号機が後転しながらビルにぶつかつた。
ビルが倒壊し、一号機に直撃する。

「神上！」

「大丈夫だ。MWFWはそんなに柔じやない」

一号機が瓦礫の中から姿を表した。

「つたぐ、俺のやつより最新型だからっていい気になりやがつて！」

一号機が一号機に向かつて一回腕をあげた。

挑発には見えなかつたが、それ以外の何物でもなかつた。

「・・・なめやがつて！」

一号機は二号機へと猛進をしかける。

しかし、一の舞に過ぎなかつた。

「感情で動くつてのも禁止するわけじゃないが、もうじょつと冷静になつたらどうだ？」

まず、はつきりした話、足でも近距離でも一号機、二号機共に二号機には敵わない。

機銃で狙うのもありだが、お前の腕だと脚部以外も損害させてダメにしちまうだろうしな。

「ミサイルのピンポイントも無理だ」

「じゃあどうしろって言つんだよ！」

「そこは若者なりの柔軟な思考で考えてくれ

「つたぐ・・・・・・」

一号機はまた二号機への猛進を開始する。

一度あることは二度・・・無かつた。

一号機は振り上げる二号機の腕をかわし、横から蹴りを入れた。

一号機が轟音とともにビルへと倒れこむ。

二号機が機銃を発射したが脚部には当たらなかつた。

「搭乗室の損壊率が一割オーバーだぞ」

「わかつてゐ！」

一号機は二号機の脚部を踏み潰そつとするが受け止められて逆側に返される。

一号機に一度田のビル直撃が炸裂した。

「くつ・・・・・・・」

一号機は一号機がひるんでいる隙に走つて逃げ出した。

「待ちやがれ！」

「神上・・・・・」

「お前がその言葉で呼ぶな！ 気持ち悪い！」

「根性さえあればどうにかなるという信念をそのまま曲げたりしないじやないのか？」

もう少し柔軟に考えてくれよ。むやみに追いかけたところで燃料切れになる以外に止まる方法は無いんだ。

もつとも、そこまで追いかけたら一号機の燃料のほうがもたないけどな」

「どうすればいいんだ？ 一体」

それでも一号機は二号機の追尾をやめない。

「神上！」

「剣崎か？」

「妻と別居中の四十年代壮年男性と一緒にするな！」

「やうなのか？」

「さつき聞いた」

「お前、あいつの」と敬ってんの？ 下げずんでんの？」

「国家研究員としては敬っているが、一男性としては下げずんでいる」

「・・・聞くことも無かつたか」

「本人が聞いているの知ってるくせにやがてのやめな。

・・・事実だが」

「神上！俺のいるところに二号機を来させろ！」

彼が反論した。

「三号機なら二号機をどうにかできるのか？」

「そうこういじだーただ、俺の姿を消すからな。場所は覚えておけよー」

「姿を消す？ どうやって？」

「いいから黙つてやれ！」

「・・・・・・」

一号機は二号機の行く手を機銃で制限しながら、

二号機のいる場所へと導いていく。
レーダーから二号機の姿が消えた。

「本当に消えやがった・・・・・・

何の案があるのか知らないが、やるしかないか！」

一号機が二号機を二号機がいた場所へと導いていく。
「・・・煙・・・・・・?

二号機がレーダーに復帰したとき、田の前にも二号機はいた。
「やつこいつとか・・・・・・」

三号機が腕部を攻撃する。

一号機の唯一の攻撃手段が失われた。

立ち往生する一号機をよそに一号機と二号機は一号機の脚部を破壊した。

「Mission Computer

「・・・いいとこ取りが。

とりあえずどうするんだ?」

「一号機を止止めする」とがお前らの任務じゃないだろ?持つてこい

「つたく・・・・・・」

一号機が二号機に近づく。

が、急停止した。

「どうやつて?」

「・・・そうだったな。わかつた。医療班を派遣する。搭乗員も気絶しているようだしな」

「そういえば、搭乗員って誰よ」

「星名美月 73・65・72の微妙なやつだ」

「そこだけしつかりしてるとなよ。しかも女か

「さすがに男四人でこれからやつしていくのはきつこもんがあるだ

る。

それに通常語じやなさそうだし

「通常語じやない?どうこいつ意味だ?」

「星名は関西人だ」

第七章 結束 Solibarity

第七章 結束 Solibarity

「ツツコリビンありすぎやなあ。」の研究所
彼女は他の一人と同様、とくにビリコリともなく、すみやか
に研究所へと運ばれた。

「ツツコリビンみて、例えば？」

「まず、床も壁も全部鉄ってセンスなさすぎやあ～とか、
なんで四十年のおっちゃんが研究員やねん…もううちはつと若いの
にしうや～とか、

なんでこんな可憐な美女が見るからに怪しい男三人に囲まれて生
活しなきゃならへんのやあ～とか

「・・・自分で可憐な美女といつのはあからさまにおかしいが」「
だつてその通りやもん。」

「彼女がどんな仕草をしようがおかまいなしに彼は続けた。
「まず、標準語をしゃべつたらどうだ？」これは関西じやない
「標準語？これが標準語やあらへんのか？」

・・・・・

「生まれと育ちは」

「生まれも育ちもトウールの首都、大阪や」

「・・・お前の生まれた場所に行って小一時間聞いて詰めたい。
お前らは自分達のことをどんな風に思つてんのかと。

お前らは他の世界を見たことがあるのかと」

「何や渉。行きとなつたら連れてつてあげるけど

「・・・激しく遠慮しとく」

「そりいえば、うちらつてなんで呼ばれたん？」

彼らは彼女がここに運び込まれた翌日、彼に呼び出されたのであ
つた。

「さあ。あれ関連だつていうことはほほ間違いないだろ」「あれ、と言えば一号機に乗つとつたのつて、渉なん?」

「そうだが、どうかしたか?」

「涉弱すぎ」

やはり、純血の関西人だけある。

「・・・お前・・・・・・」

「だつて、どんなやつが現れたかと思つたら、猛進してくるだけのアホな有人兵器やもん。

笑い死ぬといひやつたわ」

「・・・・・・・

といひでお前、あれの操縦がなんでうまいんだ?」

彼は彼女と話しているどじゅやら不機嫌になつてしまふらしい。「あれ作ったの、うちが越してきた近所のおっちゃん連中やから、出来たころに全部見せられてん。操縦も習つたんや。だから、あれが隠されていた場所もわかつたんよ」

「どうりで」

「これぞまさに人徳つていうやつちやな」

彼女が言つことまんざりではない。

「・・・ついた瞬間に直行かよ」

三人はそれぞれのMWFWに乗せられていた。

「ま、結束力を高めるということで、みなさんにちょっととした戦いをやつてもらいます」

「バトロワみたいな言いかたするなよ。

それに結束力を高めるんだつたら全員でデミノを並べて倒すとかやりやあいい話だろ?」

「まあ、デミノ並べもやうかなど思つたが、

MWFWにそれだけの精密作業をやらせることが出来ないといふこと、

何より予算が無いからな」

彼が口をはさんだ。

「ここで戦闘をするほうがよほど予算がかかるのでは？」

「大丈夫大丈夫。ミサイルとか機銃関係は今ロックしておいてあるから。

それに、そうしておかないと星名に不利だからな」「星名のこと微妙とか言つといて、結局はそれかよ

「つちのこと微妙、やとー？」

一号機が格納庫の壁を思い切り蹴る。

「おー。やめろって星名」

「うちのひとブサイクよばわりするやつに、苗字など呼ばれとうない！」

一号機が一号機を横から蹴った。

抵抗する暇もなく一号機が横に倒れる。

一号機は自動プログラムによつて再び起立した。

「何すんのや！」

「お前が壁なんか蹴つて倒壊なんかしたら危険だからな」「ここには地下だぞ」

「ええい！そんなことどうでもいいんや！」

一号機が一号機を壁に叩きつける。

一号機がその場に疲れたように座り込む。

「んだとコラア！」

お互に倒し倒され戦闘がはじまつた。

「ところで城ヶ咲研究員」

「なんだ？」

「なんのために戦闘をさせるのですか？」

・・・彼らの場合は喧嘩のようですが

「戦闘つていうより、むしろ喧嘩のほうがいいんだ。喧嘩するほど仲がいいってことで」

「それは喧嘩をするのは仲がいいといつてことだ」

「喧嘩をさせれば仲がよくなるという意味ではないと思いませんが

「まあ、とにかくお前達が仲むつまじくドンパチやればそれだけでいいんだ」

「はあ・・・・・・」

三号機が一号機と二号機の仲介に入る。

「お前らしい加減にしろ。それでも成人を迎える身か」

「うるさい！黙つとれ！」

が、両機に同時に蹴られてしまった。

三号機が火花を散らしながら停止する。

「お前ら、俺に向かつて黙れ・・・だと」

「その通り！」

「その言葉、そつくりそのままお前ら一人に返してやる！」

「臨むところだ！」

それから約三時間、格納庫には火花と罵倒、暴言が絶えなかつた。

「・・・・・・・・

「・・・・・・・・

「・・・・・・・・

「・・・・・・・・

「・・・・・・・・

「・・・・・・・・

「はあ・・・・・・

若者よ。大人になれ

「・・・・矛盾してる」「

「ま、そこまでシンクロできるなら仲が良くなつたと考えていいか

「・・・こいつらと仲が良い？

反吐が出る」「

「わかった。お手上げだ」

彼らが同時に目を覚ましたのはそれから約六時間後だった。

「・・・寝てたのか？」「

「・・・それはそうとお前ら一緒に喋るな」「

まるで二つ子であるかのような口調だった。

「「「〇ぐ。まず渉から」」」

「年甲斐も無く馬鹿なことじめちまつたな。俺り」

「もつとも、二十代もいつておらへんから年甲斐も無くつかうのは変やる」

「お前、十代だったのか?」

「よつほど剣崎の方が十代らしくないやんか。口調とかいろいろ。

それに涉より大人やしな

「彼は疑問を抱いた。

「それは落ち着いてこなの? 老けてるってことなの?」

?

「両方や。両方」

「せめて片方にしてくれ。」こつと比較されるといつちが困る」

「俺もだよ

「彼女は少し笑った。

「なんだよ」

「兄弟みたいやなつて思つたから

「いい加減にしろ」

「そういう所なんよ」

「人は溜め息をついた。

「結局、城ヶ咲研究員の思つがままになつたな。マイナスではなかつたが」

第八章 本能 Instinct

第八章 本能 Instinct

「暇だな。すこぶる」

あれから1週間以上彼らは来ていなかつた。

「だから言つただろ？しばらくは来ないつて」

「おっちゃん。しばらく来いへんからつてこれじゃあ生き地獄や。こんなところに缶詰にされて服も買えへんし。

ブルーブラッドとは呼ばれたくないんや」

「ブルーブラッド？青い血？」

彼女が説明をはじめる。

「ブルーブラッドつちゅうのはな、臆病者がチキンつて言われるのと同種類のものなんや。

由来は、肌が白すぎる人つて手首とかに青く血管が浮き出るやろ？
そのことを称してるくろく外に出ずに入で過（）しているいわばお嬢様のことをブルーブラッドっていうんや」

「はー」

「ひー」

「ふー」

「へー」

「ほー」

「余分な三人はどうから来たんや」

全員がほぼ同時にコーヒーをする。

「お前ら、本当にいいのか？砂糖そんなに少なくて」

「俺は1個で十分だ」

「私はブラックが好きなので」

「うちも本当はもっと入れたいんやけど少し出でてきたからな
彼は彼女にちょっとかいを出す。

「いつもなんじやないのか？」

彼女は机に「一ヒーカップ」を叩きつけた。

「じゃがしい！美しい人つちゅうのはな、常に周りと自分のことこの氣を掛けているや。

せやから、ほんのわざこなことでも氣にして微調整を重ねていくもんなんや」

「お前は『微』調整じやないんじやないのか？」

「じゃがしい！」

またほぼ全員同時に「一ヒー」をする。

「ところでおっさん、四号機とか開発しないのか？」

「んー・・・・・・

水中型とか空中型とか地底型とか考えるにはいろいろあるが、今どこのは無い。

ま、今のところは三機で十分だな」

彼女が「一ヒーカップ」から田を離し、空気を見ながら言った。「四号機かー。今度はイケメンがいいなー」

「イケメンならこるだろ。ここに」

「ここにも」

「はい例外」

彼女は即座に否定した。

「しかし、俺は賛成だな。

「こじつよりもっと可憐という言葉が似合つ女とかさ」

「かつちーん。うちじや不服なんか～？」

「万に一つも満足しておりません」

「勝負や渉！今度こそ決着つけたるー。」

二人は格納庫へと向かった。

パソコンのモニターに格納庫が映し出される。

「しかし、二人とも暇人だな。毎日毎日勝負勝負つて・・・・・・」

「ですが、まんざら無意味というわけでもなさそうです。

日々、彼らは成長していますし」

「お前は成長しなくていいのか?」「私は結構です。

「それよりも終わらせていいですか?毎日だと見飽きます」「そうだな。」

「ふとんがふつとんだ」

「一号機がかなり大きさにずつこけた。」

「通信を使ってないのにどこまで地獄耳なんだか」「やはり、大阪人の本能・・・でしょうか」

「一号機から通信が入る。」

「龍牙!またお前か!」

「いいや。今度は城ヶ咲研究員だ」

「どっちでもええ!こっち!」
「一号機は通信を切った。」

「別に無理に付き合つ必要ないぞ」

「見てているよりは、しているほうがよっぽど暇ではあります」「そうか」

「来たか龍牙!」

「お望み通りだ」

「一号機は姿勢をかがめて突撃する。」

「一本の腕が三号機の脚部の付け根をとらえる。」

「が、三号機が動くはずも無い。」

「三号機は右前足を一号機に向かって打ち付ける。」

「一号機が起き上がるその前に三号機は後足を使って仁王立ちをし、全体重を一号機にぶつける。」

「が、それであっけなく踏みつけられて動けなくなる一号機では無い。」

「とつさの判断で自動プログラムより早く一号機を起立させた。」

「力士対ボクサーみたいな感じだな」

「一号機は空振りした三号機の頭部に強烈なアッパーをお見舞いす

る。

二号機の頭部が宙を舞う。

「・・・おじおじ」

二号機は余韻に浸つていて、一号機に右前足を軸にしての回し蹴りをくらわせる。

一号機が素早く壁に叩きつけられる。

二号機は一号機がまだ起立していない状態を狙つて再度のしかかりをくらわせる。

が、全ては彼女の思つ通りだった。

一号機は三号機が仁王立ちしている間に屈伸運動を利用して二号機へと跳びかかる。

三号機の腹部は見事に空を向いてしまった。

一号機は両後足と両中足を押さえた。

「勝負あり・・・やな」

「・・・負けには負けた。

だが、二号機の頭部を吹っ飛ばしてどりすく「あ・・・・・」

彼女はようやくその事態に気付いた。

「三号機の頭部は武器も搭載していないし、俺も乗る場所じゃない。だが、お前らにとつてはそこが全てだ。よく考えることだな。

負け犬の遠吠えにしか聞こえないかも知れないが」

「そりやな・・・すんまへん」

「いや」

二号機は頭部と胸部の連結部分から部品を撒き散らしながら立ち上がつた。

「城ヶ咲研究員」

「大丈夫だ。それくらいなら五分もかからない。

頭部の話だが、まあ、MWFW同士で戦うというの今の状況ではほほりえないからな。星名もあんまり気にすること無いだろ」

「気にするて。もしかしたら遊びのつもりやのに一人殺してしまつところやつたんから」

「ドンマイとしかいじょうがないな」

「おおきに」

が、一、二分後には元の彼女へ戻っていた。

「結局のところ、おっちゃんは何をしている人なん? 国家研究員つちゅうことはのぞいて」

「首都防衛つてところか。

もつとも、MWFWの原型を考え出したのは別のやつだけだな」「別のやつって?」

「同期だ。実験に失敗して死んだが」

「・・・すんまへん」

彼は全く嫌なことをいつた顔一つしていなかつた。

「一日に一回も謝るなんて星名らしくないぞ」

「そやね」

彼は彼女の質問に続けて言つた。

「MWFWの原型つてどんなのだ?」

「A11 SpecieT i m e R i o t B a t t l e W e a p o n」

「は?」

「A11 SpecieT i m e R i o t B a t t l e W e a p o n。全時空機動戦闘兵器の略だ。どうやらそいつは略語の文字をいじくつて、

アストラビューポーと呼ばせたかったそつだが」

「彼はコーヒーをすすつた。

「アストラビューポーか。MWFWよりはるかに呼びやすいな。でも全時空機動つてところが引っ掛かるんだが」

「なんでも、この世界の裏にはUnderWorldつていうこの世界なのにこの世界じゃないこの世界があつて」

「この世界じゃないこの世界つてどうこつことだよ」

「つまりは両面同じのコイントスの裏と表だと思えばいい。

・・・あつたら実用価値が無さそうだが。

UnderWorldで起きたことはOneWorld・・・つまりこの世界にも起きるって寸法だ。

で、なんかそこに無人兵器とは比べ物にならないような生物が出てきてこの世界に影響が出すぎたからそいつらをやつつけるためにアストラビューアは作られたんだそうだ。

その生物も六機のアストラビューアによつて全滅させられたそうだ

が

彼は一息つくとまたコーヒーをすすつた。

「ほお～。トウールも國家研究員もまだまだ捨てたもんじゃねえな」「アストラビューアのほうは人型でMWFIWは一脚型なんだけどな」「うち、人型の方がよかつた」

「馬鹿だな。人型の方が無駄に材料費が増えるんだ。

まあ、確かに一脚型よりこけたときに起き上がりやすいとか、別型でも気軽に武器交換ができるとかいといところはあるけどよ

「ほお～」

全員がすすつた「ヒーヒー」の音は、
敵襲警報によつてかきけされた。

「敵襲！」

「・・・大型戦闘機一隻・・・そこから今も隨時無人兵器が投入されてゐる・・・・・・・

やつらも俺達を完全に叩きのめそつたわけか」

三人はすでに格納庫へと行つていた。

「今日は尋常に無い。兵装ビルも全棟起動させる。

絶対に守りきれ。この町を。トウールを・・・・・・

「おっさん、がらにもなくそう言つこというなよな

「城ヶ咲研究員にその言葉は似合いません」

「そいやでおっちゃん」

彼は一呼吸おいた。

「準備完了したか

「完了しました」

「OK！」

「いつでもどうぞ

「MWFW一號機、二號機、三號機、射出ー。」

第九章 決戦 Decisive

第九章 決戦 Decisive

「・・・・・」

「・・・・・」

「・・・・・」

三人は田の前の光景に絶句していた。

倒壊し、跡形も無くなつたビル。

今も燃え続ける車や民家。

ビル風によつて発生した多数の炎の竜巻。

あちこちであがる黒煙は今を昏と感じさせないような暗さにして
いる。

そして何より、上空を飛んでいる五百メートルはあるつかといふ
戦闘機と、

そこから落ちてくる点のような無人兵器に田を惹いた。

「お前らはそちらへんにいる無人兵器は気にせずに戦闘機を破壊す
ることだけ考える。」

無人兵器は兵装ビルでなんとかする」

「兵装ビルって・・・ただの足止めにしかならないって言つてだじ
やねえかよ！」

「・・・飽和攻撃をしかけたが主砲が一基壊れるだけだった。
なら、無理でもさせるしかないんだ。それが俺に出来る最高のこ

とだからな」

もう一度彼は戦闘機を見上げた。

「だが、どうやってあそこまで行くんだ？」

「MWFWには飛行能力が無い。」

三号機はミサイルとレーザー砲での攻撃をするしかないだろう。
一号機、二号機は三号機が重傷を負えて戻つていく戦闘機に乗つ

て直接叩いたほうがいい。・・・かなり危険だが。

その後に一号機がエンジン部分への突破口を開き、一号機が撃つ

て終了だ

「わかった

彼は彼との通信を切った。

「聞いたか？」

「ああ」

「もちろんや」

「剣崎。頼む」

「わかった」

三号機は飛行機の迎撃を開始する。

一号機と二号機はもつとも高い兵装ビルで待機する。

「剣崎！」

「わかっている…」

三号機はレーザー砲を彼らに向かつて発射するが、かすりもしない。

「城ヶ咲研究員」

「ミサイルでは無理だ。戦闘機自体が吹っ飛ぶ。

エンジンにかかるかかすらないかの微妙な度合いを見ないと、戦

闘機は帰艦しない。

がんばれ・・・つたない言葉だが、これしか俺には言つ事が無い

「了解」

三号機にミサイルのロックがかかる。

三号機は即座にミサイルを相撲ちにし、回避する。

「がんばれ剣崎！」

「ファイト！」

「・・・子供じみた言い方しやがって」

三号機のレーザー砲が戦闘機をかすつた。

一号機が飛び乗る。

「俺のも頼む」

「今までコツはつかんだ。安心しろ」

三号機のレーザー砲が戦闘機をかすった。

一号機が飛び乗る。

「星名の乗つてたやつが敵の戦闘機に撃墜された。
やつらは容赦しない。気をつけろ」

「わかった！」

一号機がミサイルにロックされたことを告げる。

「ちっ・・・・・・」

ミサイルがミサイルを撃墜した。

「サンキュー！」

「発音の良くない英語など聞きたくない。とくにお前のはな

一号機が彼に飛び移った。

一号機が彼に向かつて機銃を放つた。

鋭い音を立てながら、全ての弾は火の海へと消えた。

「二号機が来るまで待て。お前のでは無理だ」

「わかった」

戦闘機の機銃が一号機に向けて発射された。

一号機は戦闘機の甲板を駆け出す。

が、たかだが五百メートルの戦闘機。端はすぐにきてしまう。

一号機は戦闘機から足を踏み外す。

「コクピット？」

彼の下に人の姿が見えた。

「まだ負けたわけじゃねえが、一矢報いてやるか！」

一号機はコクピットのガラスを思い切り蹴った。

数個の小さな塊とガラスの破片が飛び出す。

一号機はすぐさま消え失せた。

「操縦不可能かよ！」

「神上！体勢を立て直せ！直立すれば小規模の被害で済む！」

「操縦不可能だぞ！」

「じついうときこそ根性を使うんだろ！」

「使いたいときだけ使いやがって……」

「曲がれー！」

少しずつ、一号機が回転をはじめた。

「無理だ！間に合わない！やめろ！」

「……不可能を可能にするのが根性じやねえのかよー。」

地上からわずか十メートルの地点で一号機の体勢は整った。

一号機の脚部が嫌な音をたてる。

「脚部の状態からして戦闘機に飛び乗れるチャンスは一回だ。はずすな」

「わかった！」

一号機が兵装ビルの屋上へと上る。

「落ちてきやがって。高校もそんなふうにして落ちたのか？」「余計なお世話だ！」

一号機が帰艦しようとする戦闘機に飛び乗った。

乗るとほぼ同時に三つのミサイルのロックがかかる。

「まかせろー！」

三号機のミサイルはミサイル一機を撃破した。

「はずした！」

一号機が不安定な戦闘機の上でターンをする。

「なにも、お前にしかミサイルの特権が無いわけじゃないんだ！」

一号機のミサイルが最後のミサイルを矢の如く撃墜した。

「行け。あとはお前だけだ」

「OK！」

「聞きたくないと言つたはずだが

「さあね」

「わかった。帰つてきたらまた殴つてやる」

「……のぞむところだ！」

一号機は彼へ飛び移った。

一号機の脚部が今までに無いほど嫌な音をたてた。

一号機は全ての場所をこじ開けて無人兵器との戦闘に入っている。

あとはお前がそれを破壊すればほぼ終わりだ。

撃つたら一刻も早く出る。巻き添えをくらつまえに

「わかった！・・・といつより俺、さつきから『わかった！』『ば

かり言つてるな

「つべこべ言つな！」

一号機は二号機がこじ開けた穴から中へと進入する。

「壊れるんだ！早く！一刻も早く！」

一号機が放つた刃は彼のエンジンを見事直撃した。

爆発した確認を取りうつに、一号機は素早く脱出した。頭上で何か爆撃とは違うような音がした。

「・・・機能停止か

すでに操縦室には一つのランプもついていなかつた。

「さて、このままスクラップになるか、気絶して生き延びるかは運命にまかせましょつか」

一号機は地面に脚部から激突し、そのまま動くことはなかつた。

第十章 終幕 End

第十章 ～終幕～ End

「あれは終わったのか・・・・」

「彼が起きてはじめに口にした言葉はそれだった。

「あそこから落ちたわりにはどこも痛くないな。
ま、人生、健康が一番つてか」

彼は素早く布団から出るといつもの場所へ向かった。

「誰もいない」

いささか、普通の表現のような氣もするが、彼らのいない部屋は
ひどくみすぼらしく見えた。

「手紙？」

そこには

「役所の屋上で日の光を浴びてくる。
役所の屋上へは格納庫へ行くエレベーターでそういう上に上がると
行ける」

とだけ書いてあった。

「役所の屋上つて・・・行けたのかよ」

そこには三人が夕日を見ながら黄昏ていた。

「キモツ」

「何がだよ」

「どう考へてもこの三人が揃つて夕日を見てたらそう思つさ

「どういう意味や。それ」

「ま、深くは考へるな」

彼は彼らと同じように夕日を見た。

「そりいえばおひひやん、これからどうなるん？」

「あれだけのことをやつてのけたからなあ。

MWFWの戦闘能力が評価されて量産型が作られる」とはほほ
間違いないだろ?」

彼は大して長くも喋つていないので一息ついた。
「そうしたら、トゥールもズエルダになんとか互角の位置までには
いけるだろ?」

それと、数日後にはお前らの表彰なんていうのも待つてゐんじや
ないのか?

もとはといえば、お前らただの民間人だからな

「えへ、表彰? そんならいろいろ服とか買ってこなきゃならない
やん」

「意味無いだろそんなんの?」

「じゃが・・・ん?・・・なるほど。

それは服を買つても意味が無いということは、今まで十分美
人やつていうことやな?」

「さあな

「神上。そこはきちつと否定しておかないとダメだぞ」「
彼は何も言わなかつた。

「とりあえず、お前らどうする?

」そのまま軍に入れば即少佐ぐらいになれることはほぼ間違いない
が。

それに、何しろ経験者だからな

「私は入りません。戦場が好きでは無いので」

「俺は入ろうかな」

「なんや。つい昨日まで入りたくないって言つとつた人が。

それに、親からは否定されたんやろ? 入るなつて」

「親に反抗つてことをしてみたか? たつていうのも一つはあるが、
俺らが命をかけて守つたこの町を、この国をこれからも守りたい
と思ったからな」

「うちはそんな気、全然無かつたけどな。

「うちは入らうかな。渉も入る」とやつ

彼が茶々をいれる。

「おーっと、渉を追うのか？星名」

「なんか、一応戦友つかつちゅうことで親しみ持つたからな。つちがいへんと、軍でも何かやらかしそうや」

「俺はトラブルメーカーじゃないだ」

「しそうやつて言つとるだけや」

「なんだかんだで星名、結局お前も否定しないんだな夕日が少しづつ欠けはじめる。

「その前におふくろに会えるか？」

「おーっと渉、マザロンか？」

「そういうわけじゃねえよ。

軍に入りたいつでいうのも言わなきやならなし、また打たれなきやいけないと思つてな

「せつかくうちが渉のキレそつな台詞を言つてやつたのに、スルーしあつた・・・・・・」

「ま、人生いろこれあるだ

彼は彼女の肩に手を置く。

「なんや？抱き寄せよつとしとるんか？」

「いや。なぐさめだ。

つていうかそれぐらいわかれよ」

「神上、剣崎、星名。どうやら軍にも入れなくなつたようだ」

彼はいきなり大声でそう言った。

「どうこいつことだ？」

「どうこいつとも何もそつと言つことだ。今までありがとうなお前ら」

「城ヶ咲研究員。星名。それに神上。ありがと」

「おつかさん。龍牙。渉。ありがと」

「俺も言つたほづがいいのか？」

「お前らありがと」

その後、何事も無かつたかのように彼らは爆風に包まれた。

第十章 終幕 End (後書き)

あとがき

今回はMWFW、対無人兵器用有人兵器をお読みいただき、誠にありがとうございます。

完成度としてはまちまち・・・ですかね。

それぞれの章に文の量の違いがあつたので・・・なんなんだかな

。

ちなみに の文章までが過去に書いたものとなります。
某所では既にHPされていますが、再HPということで。
直す気はないッス。サーベン。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8878e/>

対無人兵器用有人兵器 MW F UW

2010年10月8日15時56分発行